（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地球環境学）	氏名	Srijon Barua (スリジョン　バルア)
論文題目	Living With Infrastructure: A study on the management and adaptation of social practices around transportation infrastructure residual spaces　(インフラと共に生きる: 交通インフラの余白空間利用における管理と適応に関する研究)		

（論文内容の要旨）

本論文は、バングラデシュの交通インフラ施設の一つである高速道路の高架下空間（余白空間）利用について、ダッカのケーススタディを中心としながら都市におけるその社会性を考察し、今後の高架下空間のあり方を論じたもので、全6章からなっている。

第1章は序論であり、都市化と交通インフラ開発の結果として創出される高架下空間に関する研究の背景・目的、研究の方法・構成を示した。特にグローバル・サウスにおける本研究の重要性について参考文献を用いながら論じ、高架下空間への適応やその環境など研究課題の重要性を示した。

第 2 章では、本研究に関する理論的な枠組みとして、ダッカのケーススタディから交通インフラの余白空間利用について都市的文脈の視点からまとめた。これに関連して社会経済的な視点、公共空間としてのあり方、またその空間的・建築的な管理に関して、フィールド調査と関連資料から現在の交通インフラの余白下空間の認識を是正する必要があることを示した。

第 3 章では、交通インフラの余白空間利用に関連する研究者、実務者、及び一般市民の視点を探るため、様々な国の参加者とオンラインシンポジウムを開催した。このシンポジウムで、専門家による各地の事例紹介やシンポジウムに参加した専門家・一般市民の意見を集約し、交通インフラの異なる文脈下において共通する 5 つの要素（インフラの管理、インフラの機能性、インフラの居住性、利用者のアクセス可能性、利用空間の収益性）を抽出した。

第 4 章では、交通インフラの余白空間利用に関する事例研究として、バングラデシュ、ヨーロッパ、日本における 7 つのケーススタディを取り上げ、現地フィールド調査、文献資料により、交通インフラ成立期から余白空間利用の適用プロセスを時系列で整理しながら、5 つの要素について分析した。これらの比較研究に基づき、空間利用マネジメントの側面から持続可能な利用方法を示した。

第 5 章では、第 4 章の 7 つのケーススタディから得られた交通インフラがもつ社会的価値、商業的価値、政策的価値という多様な役割を明らかにし、交通インフラ開発の方向性を示した。これらの成果をもとにバングラデシュの都市文脈を考慮した具体的提案をおこない、その一部が実際に適用された。

第 6 章は結論であり、各章で示された主要な成果をまとめ、これらの研究成果とともに課題と今後の展望を示した。交通インフラの余白空間は、建設に伴って偶発的にできた付加的存在ではなく、都市機能を有する社会的空間であるという認識をもつことで、多様性のある豊かな都市形成に寄与する潜在性があると結論付けた。

（ 続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、都市化が著しいバングラデシュ・ダッカの高速道路の高架下空間利用に関する都市の社会性に着目したものである。現代の都市インフラ施設は、多くの場合地域の社会経済的、文化的価値の点から無計画な状況にある。ダッカ市内にある高架下空間は、全体で約84万平方メートルもの広さがあるが、ほとんどが利用されていないという報告もある。また、利用されていてもインフォーマルな占有が多く、明確な政策や管理方法が確立されていないため、立ち退きや不当な賃料負荷が発生し、高架下空間の持続的な利用を複雑かつ困難にしている。年間20億ドルの社会経済的損失にもつながるとも推定されている。このような状況から、交通インフラの余白空間利用における効果的な管理戦略や土地利用計画のあり方を明らかにするため、現地のフィールド調査に加え、専門家、一般市民を交えたシンポジウムの開催、交通インフラに関する欧州や日本の事例調査を実施した。これにより得られた具体的な成果は以下の通りである。

1. 交通インフラの余白空間利用に関連して、様々な国（インド、バングラデシュ、オランダ、イギリス、日本）の研究者、実務者と一般市民の参加によるオンラインシンポジウムを企画、開催した。このシンポジウムを通して、専門家による各地の事例を紹介するプレゼンテーションや、シンポジウムに参加した専門家18人と一般市民115人の意見を集約し、交通インフラの異なる文脈下において共通する5つの要素（インフラの管理、インフラの機能性、インフラの居住性、利用者のアクセス可能性、利用空間の収益性）を抽出した。

2. 交通インフラの余白空間利用に関する事例研究として、バングラデシュ2カ所（ダッカ）、ヨーロッパ4カ所（チューリッヒ、ロンドン、パリ、フィレンツェ）、日本1カ所（横浜）における7つのケーススタディを取り上げ、現地フィールド調査、文献資料により、交通インフラ成立期から余白空間利用の適用プロセスを時系列で整理しながら、5つの要素について分析した。これらの比較研究を通して、空間利用マネジメントの側面から持続可能な利用方法を示した。

3. 7つのケーススタディから得られた交通インフラがもつ社会的価値、商業的価値、政策的価値という多様な役割を明らかにし、交通インフラ開発の方向性を示した。これらの成果をもとに、バングラデシュの都市文脈を考慮した具体的提案をダッカ市長におこない、ダッカ・サウス・シティ・コーポレーションが実施するプロジェクトの一部として、高架道路下面を公衆のための広告やアートとして利用するアイデアが実現された。

以上、本論文はバングラデシュ・ダッカの高速道路の高架下空間利用の内容を精査するとともに、現地フィールド調査、シンポジウムからの知見、各国の事例調査で得られた資料・情報に基づき、交通インフラの余白空間のあり方に有意義な指針を示した。また、関連する専門家を招聘したシンポジウムを自ら企画・開催し有益な情報を得たことや、研究成果に基づく具体的な提案をダッカ市へおこない、その一部が実際に社会実装されるなど、実践的なマネジメントとしても評価できる。これらは、バングラデシュ・ダッカのみならず現代のグローバル・サウスにおける都市空間の機能を向上させる総合的な都市政策にも有用な方向性を提供するものであり、学術上、実際上、社会的に寄与するところは大きい。また、拡大複雑化していく都市における人間環境の持続可能性という視点からも地球環境学の発展に大きく貢献した。よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年10月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降